

Festival 第10回ディアギレフ・フェスティバル

バレエ・リュスなどの興行師として知られるセルゲイ・ディアギレフ(1872~1929年)の故郷ロシアのペルミで、彼の名前を冠した第10回フェスティバルが6月17日から30日まで開催された。今年はリンツ州立歌劇場他、4劇場との共同制作で故ジェラルド・ホルティエに捧げたヴェルディ《椿姫》で6月17日に幕を開けた。

ハリウッド俳優のポートレートでも知られるロバート・ウィルソンの演出は、すべての無駄を排除した「歌舞伎にも通じる表現」と本人も自負する舞台だが、純粋に音楽にのみ語らせるという意図では成功していたと言えよう。テオドール・クルレンツィスの展開する音楽は、ヴェルディの書いた音符たちを生理的な自然さで波打たせることに集中し、慣習のフェルマータやリテヌートすら削除し、極力感傷的になることを避けた斬新な解釈だった。当劇場のプリマ、ナジェージュダ・パーヴロヴァが主役のヴィオレッタを歌ったが、アルフレード役のアイラム・ヘルナンデスは、チューリヒ歌劇場でクルレンツィスが振ったヴェルディ《マクベス》でマルコムを歌っていたのを気に入られ、突如抜擢されたのだという。1カ月半で役を勉強したとは思えない余裕のある歌唱で、ロマンティックさに欠けるこの公演に、唯一甘さを加えていた。(6月19日所見)

このフェスティバルの凄いところ

Scramble Shot

は、クルレンツィス自身も語るように、全てのコンサートが全力投球なのだ。特にフィリップ・ヘルサン《トリストティア》世界初演が発したエネルギーには完全に引きつけられた(6月22日)。フランスの四人たちが作った詩に曲をつけた第1部と、ロシア語の詩で構成されている第2部に分かれているが、ハイレベルなムジカエテルナのヴォーカル・アンサンブルと演奏家によって、深い感銘を与えられた。

また、アイルランド人メゾソプラノ、ポーラ・マーフィーを迎えたコンサート(6月23日)も、ワーグナーからヒンデミットまで多様なプログラムの全てを説得力のある演奏で聴かせた。音楽界の革命の波がベルミから押し寄せて来る予感が確信に変わった。(中東生)



チューリヒ歌劇場でクルレンツィスと共演してアルフレード役への抜擢となったヘルナンデス(左)と主役のヴィオレッタを歌ったバーヴロヴァ。ディアギレフ・フェスティバル(椿姫)から ©Lucy Jansch

